

氏名(国籍)	キン ワイン シ (ミャンマー)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博甲第4524号		
学位授与年月日	平成20年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	『源氏物語』翻訳文化論		
主査	筑波大学教授	博士(文学)	荒木正純
副査	筑波大学教授		名波弘彰
副査	筑波大学教授	博士(文学)	浜名恵美
副査	筑波大学准教授	博士(文学)	青柳悦子
副査	筑波大学准教授	博士(学術)	秋山佳奈子
副査	筑波大学准教授	博士(学術)	秋山学

### 論文の内容の要旨

本論文は、『源氏物語』のミャンマー語翻訳をおこなうための基礎的研究をめざしたもので、いわば翻訳作業を支えねばならない〈比較文化論〉を目指している。本論文の構成は、以下のとおりである。

#### 序章

第一章 世界における『源氏物語』翻訳者、その出会いと翻訳の意図

第二章 『源氏物語』ミャンマー語翻訳にあたっての仏教と怨霊信仰

第三章 『源氏物語』における和歌の機能的役割と翻訳困難性

第四章 『源氏物語』の〈草子地〉とその翻訳困難性

第五章 「幻」巻にみる物語の構造、主題、その役割をめぐって

第六章 『源氏物語』のミャンマー語翻訳を行って

#### 結章

序章では、本論文の目的と問題設定、構成と内容について説明している。

第一章では、世界における『源氏物語』の翻訳者たち、末松謙澄、アーサー・ウェイリー、エドワード・G・サイデンステッカー、ロイヤル・タイラー、ルネ・シフェール、タチアーナ・L・ソコロヴァ・デリューシナなどが、いかに『源氏物語』と出会い、何故、翻訳をしようとしたかがのべられている。

第二章では、『源氏物語』の背景となっている仏教信仰について、平安時代の仏教文化を中心に、日本とミャンマーの仏教文化の対比がなされている。具体的には、『源氏物語』と1170年代のミャンマー・パガン王朝時代の詩とが比較され、両者には、仏教の思想・教義が色濃く出ていることが指摘されている。

第三章では、『源氏物語』の和歌の翻訳をめぐり、その困難さがどこにあるのかが追究されている。和歌は、三十一文字の中に、情報、感情、感動、美など多くの内容を組み込む必要から、多くの技法が開発されてきた。これらの技法は同じ文化の中で生活する者にとってはこの上なく便利で効果的であるが、異文化の言語

に翻訳する場合、しばしば翻訳困難・翻訳不可能の原因にもなっていると、それがいかに困難なことであるのかを、サイデンステッカーとタイラーの英語訳をとおして分析・検討している。

第四章は、『源氏物語』の〈草子地〉をめぐる、その翻訳の困難性について考察をおこなっている。とりわけ、ウェイリー、サイデンステッカー、タイラーの翻訳では、〈草子地〉がいかに処理されているかを分析・吟味している。彼らは「小説」として翻訳しており、〈三人称過去形〉という語りの形式を採用し、そこから逸脱することができなかったという。〈草子地〉は、三人称視点の中に混在する一人称視点の語りの部分であるから、この点をどのように処理するかが問題であるとしている。

第五章では、「光源氏物語」の最終章にあたる「幻」巻が取り上げられ、その構造・主題と位置が追究されている。著者は、この巻では〈語り手〉が紫の上を失い悲嘆に暮れた光源氏のまなざしと同化し、その悲しみのまなざしを通して物語の世界を構築しているという認識をえた上で、光源氏のまなざしを通して語られる人物の内面描写の箇所を問題とし、実際の翻訳での困難さの指摘をしている。その具体例として、タイラー訳とその25年前に出されたサイデンステッカー訳をとりあげ比較し、いかにタイラー訳が原文に近い翻訳を目指し挑戦しているかを論述している。

第六章では、ミャンマー語翻訳を実際におこない、日本語とミャンマー語間の構文上の問題、助詞・助動詞の問題、敬語の問題、また、和歌の枕詞・序詞・掛詞・縁語・引歌などの修辞、さらに文化的問題などの検討をおこなっている。その結論として、日本語の助詞・助動詞に細心の注意を傾注すれば、それなりに異文化の理解・共生を踏まえた翻訳の可能性が出てくるとしている。

終章では、論文全体の総括をし、『源氏物語』は現代文学の翻訳とはことなり、「時代性」の問題があり、外国語への翻訳には「三次元的異文化コミュニケーションの壁」が存在していると、それをいかに克服するかが課題であるとしている。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文で著者は、『源氏物語』の独自で固有な物語の構造と内容を分析し、この作品を他言語に翻訳する際に生ずる問題を析出し、その解決策の追究をおこなっている。日本人が日本文化をみるという対自的なやり方ではなく、ミャンマー人というアイデンティティーをもつ者の対他的な追究を意識的におこない、全体としてみれば、本論文は、〈異文化相互理解〉の問題を追究したものともなっている。

本論文は、まず、王朝の物語の固有性を問うために、歌文融合文体の問題（第三章）、語り手の一人称の視点が、物語叙述（三人称の語り）に介入するという視点交錯の問題（第四章）、現代の物語論としてでなく、作者（紫式部）にとっての物語・主題の問題（第五章）を精密に分析して物語文の固有性に迫り、ついでそれが、ひいては翻訳の困難性になることを、英米の既存の翻訳を比較検討することによって立証している。つまり、翻訳をかいして、比較文化論の課題を文体・物語構造にしばって追究したユニークな論文となっている。

本論文で著者は、理解もさることながら、翻訳がきわめて困難な日本文学の古典『源氏物語』を対象に、ミャンマー語への翻訳という観点から、原文を丹念に読み、また、『源氏物語』に関連する先行研究を検討し、さらに、『源氏物語』を「世界文学」にしたアーサー・ウェイリーをはじめとする先行する英語訳を綿密に比較・検討しつつ原文との差異を析出し、その原因の追究をおこなっている。この営為は新たな研究領域開拓の企てでもあり、十分評価に値する。

本論文に多々ある優れた特色をひとつあげれば、思想や文化を抽象的に論じるのではなく、追究がきわめて具体的であるということである。このことは、新しい領域を開拓したという観点から積極的に評価しなくてはならない。この分野は、著者自身の具体的な翻訳過程で経験される問題性の累積によって、さらに豊か

なものとなり、後続の研究者との議論が展開されることが期待される。

こうした独創性に富んだ本論文であるが、また惜しまれることがないわけではない。まず、著者の発想に、日本文学の外国語翻訳という観点があったために、目が英米の英語訳にむかい、多くある明治以降の日本人による日本語訳にむかわなかったかということである。つまり、明治以降、西洋化した日本社会において、与謝野晶子や谷崎潤一郎などが、同時代語に翻訳することによって、どのように自らの過去をとらえたのかという問題は扱えなかった。これを追究していれば、著者が懸念する時間的差異の問題はかなり解決したはずである。仏教文化の場合、日本人の生活文化における仏教の位置がいかに変化をしたかを析出することによってえられた成果は、同時代的に日本とミャンマーとの差異にも適用できたに相違ない。

とはいえ、こうしたことがらは今後の課題とすべきであり、著者が目指した課題は十分に遂行され、新しい領域を開拓したといえることを考慮すれば、本論文が、文化的にも学問的にも資することが多いものであると判断することができる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。